

高井一の

中部に活!

インタビュアー 高井 一 (東海テレビアナウンサー)

一般社団法人中部経済連合会会長
公益財団法人中部圏社会経済研究所評議員会議長

三田 敏雄 氏



「中部圏」という言葉を浸透させることが 魅力ある地域づくりの大切な一歩

終わりを想像すれば、
心のハードルは必ず乗り越えられる

高井 財団法人中部産業・地域活性化センターは、公益財団法人に移行し、5月1日に「公益財団法人中部圏社会経済研究所」として新たなスタートを切りました。その最初の「中部に活!」のゲストは、やはり当財団の評議員会議長である中部経

済連合会の三田会長にご登場いただき、お話を伺おうと思います。

まずは、「中部に活!」恒例の、人となりに迫るところから。名古屋のご出身で、高校時代はラグビー部、大学時代はアメフト部と、かなりのスポーツマンであったと伺っています。

三田 スポーツは大好きです。小学校時代は野球、中学校ではバレーボール、そして紹介いただいた

ように高校はラグビーで、大学はアメフト、さらに社会人になってからはサッカーをやっていました。全てがチームスポーツですね。

高井 その経験から何か得るものがあったのではないですか。

三田 強烈な思い出として、私の人生を導いてくれる宝になっていることがふたつあります。そのひとつは大学時代のアメフト部での合宿ですね。

高井 鍛えられて成長された？

三田 いや、そんなに格好のいいものではありません。10日間の合宿がとにかく苦しくて、合宿の間中、「あと何日で終わる」ということしか頭にありませんでした。しかしその中で、「どんなに苦しくても、それには限りがある」ということを学んだのです。10日間がんばれば、必ずその苦しみから解放される時が来て、その先に私の大好きな試合が待っていると。

高井 もうひとつは？

三田 これも大学時代のことですが、大学3年の時に2部リーグに上がり、さらにその2部で優勝して1部との入れ替え戦に臨んだのです。相手は東京大学。前半20対0で勝っていたにもかかわらず、後半の最後のワンプレーで逆転負けしたのです。今でも思い出すと泣けてくるくらい強烈に悔しい思い出です。当時、1部の8チームは強さという点でかっちり固まっていた、2部から上がるのはかなり至難の業だったのです。1部でトップにいた立教などのチームと春の大会で対戦した時に接戦を演じたりしていたので、前半の大量リー

ドで相手をなめていたのでしょうね。逆に東大には、一度も2部に負けたことがないという1部のプライドがあるわけです。つまり、われわれの試合に対する気持ちは前半で終わっていたのに対して、東大は絶対に負けられないという思いで最後まで戦っていた。逆転負けを喫したあとで、監督から言われた「負けて当然だ」という言葉が身に染みました。

高井 聞くだけで、その経験の重さが伝わってくるお話ですね。ただ、学生時代のスポーツであれば、合宿には必ず終わりがあるとか、試合というひとつのゴールがあったり、シーズンという区切りがあると思いますが、人生においては、出口の見えない苦しさを味わうことがありますよね。

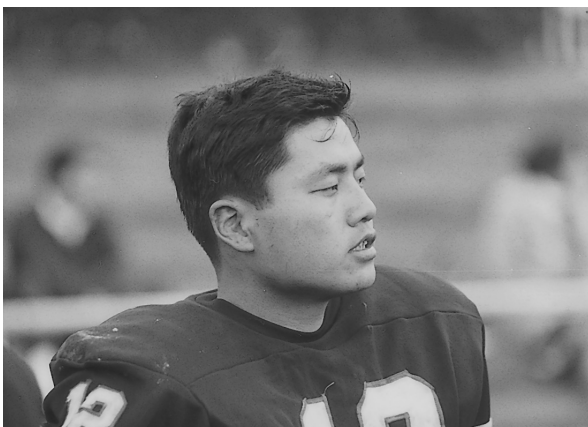
三田 確かにあります。私自身、技術屋として火力発電所の建設に携わっていた若い時に、そういう苦しさに直面したことが何度もあります。しかしそれでも、この苦しみは絶対にいつか必ず終わると思っていました。極端な話、会社にいる間はその仕事をずっとし続けるかもしれないけれど、会社を定年退職すれば終わるのだと。一生、この苦しみが続くはずはないと思っていたからこそ、乗り越えてこられたのでしょうね。

高井 つまり、ハードルは乗り越えられると？

三田 その結果が、自分が求めるものになるかどうかまではわかりませんが、心のハードルは乗り越えられる。100点を取ろうと思って99点で終わってしまうかもしれない。100点を求めるべきではないかという葛藤はあります。しかし、終わりが来れば、その苦しみからは解き放たれる。それが、私がかんばることができた大きな要因でしたね。

自然に対する「恐れ」をもち続けることが人間を成長させてくれる

高井 素人考えですが、火力にしる水力にしる、また原子力にしる、自然をコントロールして人間に役立つものを生み出すわけですが、自然というのは、東日本大震災でその力を見せつけられたよ



成蹊大学アメリカンフットボール部時代（大学3年生当時）

うに、われわれの及びもつかないことを起こしますよね。発電所の技術者として、そういう自然に立ち向かう思いというのはどのようなものなのでしょうか？

三田 「立ち向かう」というのは違いますね。むしろ、自然の法則、宇宙の法則に対しての恐れ、畏敬の念を持っていないといけないと思っていましたし、今でもそれは同じです。万有引力を発見したニュートンの言葉に、「私は、広大な砂浜の中の、たったひとつのちっぽけな貝殻を拾ったに過ぎない」というのがあります。自然の法則というのは、人間の叡智ではとてもとても掴みきれないほど大きく、人間がコントロールしているのは、これっぽっちの小さなものだよ、ということです。その思いをいつも持ち、はるかに大きな力を持っている自然に対して、「畏れ^{おそ}」を持ち続けていないといけない。自分のやったことがすべて正しく、100点だと思うところに、実は大きな落とし穴があるのです。

高井 先ほど言われた、どうしても100点を取れないというのは、そういうことでもあるのですね。

三田 そのとおりです。「絶対」などあり得ないのです。無限に近づくだけで、そこにはたどり着けない。しかし、いつもそこにたどり着く努力をするところに、成長というものがあると思いま



す。やはり、常にずっと追い求めているものがあつたほうがいい。これは、技術に限らず、あらゆるものに言えるのではないかと思います。

高井 そういう意味では、政治家も経済人も技術者も学者も、われわれマスコミも、もっともっと敬虔^{けいけん}であるべきだったなということを、東日本大震災は、まさに教えてくれましたね。

三田 それはやはり、われわれの計り知れない、大きな力が教えてくれているんでしょうね、もう一回振り返ろうと。

どんな経験も

すべて今の自分につながっている

高井 現在は、いろいろな組織のトップとしてご活躍中ですが、リーダーとして大事にされているポリシー、あるいは哲学などはありますか。

三田 規模や組織の有りようがさまざまですから、一概には言えませんが、リーダーとしてこれだけは必ず持ち、示さないといけないのは「責任感」です。リーダーは、これを言葉と体で実行していくことがなにより必要でしょう。何かトラブルが起きた時に、トラブルを起こした人の責任で終わらせないで、上長として責任が取れるかどうか。「トラブルが起きたら、それは全部私の責任だ」という覚悟を持っていないと、トップをやってはいけないと思います。何か起きた時、会社はバタバタします。その中で、トップも同じようにバタバタした瞬間に、その組織は傾いている。理想を言えば、組織をきちんと束ねながら動かしていくためには、誰しも、「自分より下に対しては責任を持って取り組む」という意識を持つことが重要だと思います。もっとも、そう思っている、自分ができているかどうかは自信がありません。いつも、「だめだなあ」と反省ばかりですから。ただ、失敗しようが楽をしようが、それがすべて、その人を形成する要素になっていくことは確かです。

高井 それは、非常によくわかります。経験というのは、その一つひとつの印象深さの大小はあり



東日本大震災の復興状況を視察（2012年3月石巻市女川町）

ますが、それらすべてが、今の自分とつながっているということですよ。

三田 そう思います。私自身のことで言えば、クラブの時に失敗して叱られたこともあるし、苦しかったことも怪我をしたこともある。逆に、ものすごい喜びだったこともある。そういう経験があったからこそ、今の自分がある。そういう意識が私はとても強いですね。

「ひらめき」や「勘」としか言えないものがありますが、これらも、過去の人生の積み上げで生まれるものだと思います。潜在意識の中からポッと出てくるのが、いわゆる「ひらめき」や「勘」。そうでないものは、ただの「当てずっぽう」ですから。

「絆」の意味を、 もう一度考えたい

高井 「中部圏」についてお伺いしたいと思います。2011年は、東日本大震災、タイの洪水、円高など、日本にとって厳しい年で、中部圏も大きな影響を受けました。今年に入って、被災地の復旧・復興に向けた取り組みが本格化するかにみえましたが、現実には復旧がなかなか進まず、逆に「絆はもう色あせたのか」と言われる状態でもあります。そのなかで、今後、中部圏がどう取り組むべきか、どういうことをやればいいのか、何ができるのか、お考えをお聞かせいただけますか。

三田 中部経済連合会の会長として、「産業を復活させながら支援していく」というのが、今、私たちに与えられた、ひとつの大きな仕事だと思います。産業を活性化していくなかで、中部だけでなく、東北とうまく連携していくことが重要です。東日本大震災でわかったとおり、中部の産業のサプライチェーンは東北まで広がっており、中部圏が活発になることが東北のサプライチェーンを復活させることにもつながるわけです。中部圏の産業をもっともっと育てて、東北地方のサプライチェーンを復興していく。逆のパターンもあるかもしれませんが、つまり、どちらかだけで考えるのではなく、つながりのなかで復興を考えていくということが、非常に大事だと思います。

高井 それを進めていくには、やはり、瓦礫の処理をどうするのかということが、大きな問題になってきますね。

三田 そのとおりです。私が今お話ししたのは、「復興」ということです。その前に「復旧」がある。現在、1年たっても復旧が終わっていない残念な状況にあるわけです。全国をあげて、一刻も早くそれを処理する体制へ持っていかないといけないのですが、放射能汚染という問題が絡んでしまったので、これをクリアしないとなかなか前へは進めない。これには地方行政だけでは無理で、やはり中央が毅然として、しっかりとしたポリシーを持って臨まないといけないと思います。

高井 同時に、瓦礫を引き受ける地域の人たちの、「一緒にやるんだ」という意識を醸成していく必要もありますね。

三田 実害があるものと気分的にいやだというもの、きちんと分けないとはいけません。「何となくいやだ」ということで拒否してしまうと、復旧、復興の支援の道を、完全に閉ざしてしまうことになる。もちろん、安全のベースはきちんと確保しないとはいませんが、ただ「いやだ」というだけで拒否をしない、そういった心の懐深さを持てるかどうか。みんなでそういうことをつくりあげていくことが、本当の意味での「絆」でしょうね。ボランティアも大切だし、義捐金も大切だけれど

も、それだけではなく、そういうものも一緒になって受け止めてあげるといふ。

「中部圏」を観光で売り込む

高井 災害ということでは、この中部圏もいろいろな災害が懸念されています。防災という点で、この中部圏はどうでしょうか。

三田 まだまだ足りないところがたくさんあると思います。何かあった時に、どう被害を小さくしていくか、起きた後にどう対処するかの二通りがあります。いずれにしても、私が今回、痛烈に感じたのは、インフラの重要性です。道路が寸断された時にどうなるか。特に、中部は産業が集積している地域だけに、その影響が非常に大きな規模で出る可能性があります。道路、飛行場、港にリダンダンシー^(※1)を持たせるなどの対策を、なるべく早く進めていくことが重要だと思います。

高井 そういう意味では、今の動脈のほとんどが海の近くにあり、もうひとつの大動脈となる「新東名」が4月14日に御殿場・三ヶ日間で開通しましたが、これが山の方にあることはいいですね。鉄道では、2015年に「北陸新幹線」がまず長野・金沢間で開通し、2027年には「リニア」も品川―名古屋間で開通する予定です。交通インフラが充実していくなかで、中部圏の発展のイメージをどのように描いておられますか？

三田 そういうインフラは、災害時だけでなく、産業の活性化にとっても、なくてはならないものです。まだ全通はしてはいませんが、東海環状自動車道が美濃まで通ったことで、美濃地方の工業団地はどんどん売れて、一大産業地域になりつつあります。産業を面として発展させていくためには、原材料、資機材、製品などの流通にかかる時間をいかに短縮できるかが重要です。美濃地方はその成功例だと思います。

※1 自然災害などにより道路や橋が機能不全に陥った場合、あらかじめ交通ネットワークやライフライン施設を多重化したり、予備の手段を用意するなど、安全のために代替手段を確保すること。

高井 中部は「ものづくりの中核圏域」と言われますが、二次産業だけでなく、一次産業もがんばっています。一次産業についてはどうですか。

三田 TPPへの対応が大きな問題となっていますが、農業に関しては全国で250万戸といわれる農家の生業を今後どのように活性化していくかが重要です。たとえば、愛知県には出荷量全国1位の野菜が数多くあります。こうした農産物の消費地は、今は名古屋をはじめとする地域に偏っていますが、インフラの整備で輸送時間が短縮されると、愛知県のものが首都圏や近畿圏でも、じゅうぶん競争力を発揮できるようになると思います。そうすると、中部の一次産業にいつそう面的な広がりが出てきます。

もうひとつ、「動く」ということに関連して、中部でまだまだ取り組みが足りないのが観光です。観光というと、娯楽という点で捉えられがちですが、今後期待される成長産業のひとつです。人が動くことで、消費が促されるので、地域を活性化する非常に大きな要素です。

高井 海外からの観光客誘致への積極的な取り組みがスタートし、まず、中華圏の観光客を取り込もうという動きがありますね。何を売り出しているのでしょうか？

三田 中国の中間所得者層は、日本に熱い思いを持っており、アンケートでは、日本に対して、温泉、食べ物、買い物の3つに魅力を感じておられるようです。中部は、温泉はもちろん豊富ですし、食べ物も中部地域ならではのおいしいものがたくさんある。また、中国人は産業観光にも高い関心を持っており、この中部圏には産業観光に関する見どころが数多く集積しています。これをもっと売り込まないといけません。今までは、アンケートをとっても「中部地方という名前すら知らない」というのがほとんど。これは、ずっと前から言われていたことなのに、真剣に取り組んでこなかった。もうそろそろ本気でやらないといけません。「知名度が低くてね」と、いつまでも弱点を言っている場合ではないと思います。

高井 東海三県という言葉もあり、中部圏という

言葉もありますが、インフラが整備されることによって、面として捉えられるという方向に変わっていき、まさに「中部はひとつ」ということになっていくのでしょうか。

売り込むネーミングとしては、やはり「中部」でしょうか。

三田 ある意味、今は「中部圏」という言葉を日本全国に、そして海外に売り込むチャンスだと思います。

高井 中部には、高山をはじめ、個々では非常に知名度の高いところはありますが、それだけでは、観光をひとつの立派な産業にしていくことはできないということですね。

三田 そうなのです。いくら知名度が高く魅力がある地域があっても、ポツポツと点在しているままではだめなのです。たとえば、北陸には金沢や能登がある。そして高山あり、下呂あり、富士山あり、さらに伊勢がある。こういったものを、「中部圏」というくくりで扱っていくことが重要だと思います。

高井 それが、年初に公表された、中部9県を連ねた広域観光エリア「昇龍道」プロジェクトですね^(※2)。まだ、立ち上げられたばかりですが、手応えはどうですか。

三田 非常にインパクトの強いネーミングと、これをぜひ進めていこうという関係者の強い意欲がありますので、まず、中国に一刻も早く乗り込もうと思っています。

高井 そのためにも、中部のゲートウェイである中部国際空港の2本目の滑走路必要ですね。

三田 これについては、ニワトリが先か卵が先かという話がよく出るのですが、インフラをつくることも必要であり、魅力ある観光地を醸成することも重要です。つまり、どちらが先かではなく、両方を同時に進めないといけないのです。

※2 人口規模が大きく、他国と比べて震災後の旅行客の戻りが早い中国をターゲットに立ち上げた誘客プロジェクト。龍が中国人にも馴染みの深い架空の生き物であることと、中部9県を天に昇る「龍」の形に見立てて命名。中部圏を一つの観光エリアとして認知してもらうきっかけづくりとして期待されている。



昇龍道プロジェクトURL：

<http://www.tb.mlit.go.jp/chubu/kikaku/syoryudo/index.html>

中部の個々の高いポテンシャルを結ぶシンクタンクとして

高井 新しい産業では、「アジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区」が国際戦略総合特区に指定されるなど、航空宇宙産業もこの地域の強みですね。この将来図は、どのようにお考えですか。

三田 この地域には日本の航空宇宙産業の代表的企業が集積しています。飛行機というのは国家の安全保障にもつながり、政治的、外交的な側面もあります。MRJも、今のところは一気には売れていませんが、その潜在力は非常に高い。今後、必ず日本の航空宇宙産業は伸びていくと思います。

高井 この航空宇宙産業に限らず、日本人、あるいは中部圏の持っているメンタリティや技術力は誇るべきものだという自負はありますが、一方で「この先大丈夫か？」と思うこともいろいろ出てきています。

三田 今の政治状況、円高、電力の安定供給に関する不安などなど、そういったものが積み重なれ

ば、海外移転の動きは、なかなか止められないだろうと思います。グローバル競争の中では、そうした行動に合理性はあるけれども、問題は、それを支えてきた中小企業が非常に困ってきていることです。空洞化という言葉が使われて、もうずいぶん経ちますが、まさに国内が「がらんどろ」になる空洞化へ向かいつつあるという危機感を強く持っています。

高井 そのなかで、冒頭にありました「苦しい時はいつまでも続くわけではない。だからがんばろう。」と思うために、どう出口を模索していくといいのでしょうか。

三田 その答えが見つけれればよいのですが、そう簡単なことではありません。世界の消費構造、産業構造が地政学的に大きく変わってきており、もう後戻りはできません。ならば、日本も産業構造をどう変革していくかということに挑戦しなければいけない。ただ、その時に、失業率を上げないように、つまり働く場をつくりながらそれを変えていかなければいけない。これに対しては、誰も明確な解を見出すことはできないでしょう。しかし、ひとつ言えるのは、「必ず解は見つかる、この苦しみは必ず乗り越えられる」と信じて、必死で知恵を絞っていくことが、今の日本に必要なということです。

高井 これまでの考え方では、もう対応できない。これをはっきり認識して、挑戦するということが、では、世界を相手に売るということにおいて、日本の課題は何でしょうか。

三田 バブルがはじける前までは、日本のものづ

くりは安泰でした。しかし今は、ものをつくっても買ってくれる人がいない。インドや中国でつくったものの方が安いので、日本のものを買ってくれないわけです。トルコに行った時に聞いた話が、この現状をよく表していると思います。「日本のものは素晴らしい、けれども高すぎる。中国のものは、安いけれど悪すぎる。韓国のものがちょうどいい」と。

高井 そうくるわけですね。

三田 そういうお客様目線でものを考えると、日本は、ものすごくいいものをつくろうとするけれども、今のお客様に合わせたものをつくるのが下手だということが言えるわけです。しかし、最高を追い求めていかないと、技術力に磨きがかからず日本の良さはなくなる。今でも、日本でしかつくれないものがいっぱいあります。何ミクロンの精度で「平ら」なものというのは、日本の町工場でしかつくれない。いいものをつくることに努力を惜しまず、付加価値を高めてそれをいかに外に売るか。そこに知恵を絞らないといけません。

今、中部経済連合会では、中部地域として「航空宇宙産業」、「次世代自動車産業」、「低炭素・資源リサイクル産業」、「長寿ヘルスケア産業」、「観光産業」の5つの産業をさらに伸ばしていきたいと取り組んでいます。それら一つひとつでは、何十兆円という大きさにはなりません。しかし、「これだ！」という目指すものをつくって、そこから広げていけば、技術の裾野を共用化できます。自動車だけ、飛行機だけだと、その産業が悪くなったら、みんな悪くなってしまうけれど、裾野を共有していれば、何かの産業が苦しいときでも、誰かが生き延び、それを次へつないでいくことができます。中部経済連合会は、中部の産業をそういう形につくり上げていくことが良いのではないかと提唱しているわけです。5つの中では、「航空宇宙産業」がトップをきっていますから、ぜひ、これを成功体験にして、次々と発展していければと考えています。

高井 そういう意味では、産官学がもっと連携して、広がりをつくっていかないといけないですね。



三田 大学や研究所との連携という意味では、今、いろいろな分野でのユーザーの「ニーズ」と「シーズ」が、実際にはうまくマッチングしていないことが多いのです。大学や研究所が、いくら「これはいい」と思っても、それだけでは商売にならない。逆に、産業界からこういうものを研究してほしいと思っても、それに関しては誰も取り組んでいない。もちろん、すぐに商売に結びつくことばかりをやっているのは将来だめになりますので、どちらも必要なのです。このミスマッチを解消していくことが重要であり、新たなスタートを切った「中部圏社会経済研究所」の大きな役割だと期待しています。人的交流も含めて、そういう交流の場づくりをしてもらいたいと思っています。

高井 中部の持っているポテンシャルは高いですから、それらを結ぶ「コーディネート力」がこの地域に必要なのですね。そこを、中部圏社会経済研究所に取り組んで欲しいということですね。交流・連携のほかにもどのようなことを期待されますか。

三田 インフラ整備が進み、産業活動が広域化し、人々の交流も活発になっています。北陸3県と滋賀県まで含む9県という、広域中部圏のシンクタンクならではの、質の高い研究や調査、あるいは具体的な提言が求められています。中部圏の経済

をきちんと分析して、各自治体や中部経済連合会をはじめとする経済団体が発表する政策提言の裏付けとなるデータや客観的な論拠を示せる、あるいは、「こんなことが知りたい」という時に、そのヒントがある、そんな存在になれば、中部圏だけでなく、日本にとっても、一目置かれるシンクタンクになると思います。実際、アメリカにはそういうところがありますよね。中部広域圏の総合的・中立的シンクタンクとして、そういう貴重な存在になって欲しいと思います。

高井 今日はお忙しいなか、ありがとうございました。中部圏のこれからの発展と、東北や北陸との連携の必要性がよくわかりました。新しい財団の活躍を期待して、応援していきたいですね。



Profile

三田 敏雄 (みた としお)

1946年愛知県生まれ。1969年成蹊大学工学部機械工学科卒業後、中部電力株式会社に入社。2003年取締役東京支社長、2005年常務取締役執行役員販売本部長を経て2006年代表取締役社長、2010年代表取締役会長に就任。ほかに一般社団法人中部経済連合会会長などに就任。

●ひとロメモ

三田議長のお話しに一度だけ「坂の上の雲」という言葉が出ました。それは「坂を上りきっても雲には手が届かない。だから100点はない。」という文脈でした。

「坂の上の雲」……日本が内憂外患に暗くうなだれている今こそ、司馬遼太郎が描いた明治人の、前だけを見つめて進む明るさが必要だという気がします。

司馬さんは、日露戦争の戦費調達に奔走した高橋是清を、「窮地に陥っても、いつかよい運が転換して来るものだ」と一心になって努力した」としました。これは三田議長の「苦しみは終わると信じて、必死で知恵を絞る」と共通する「坂」に挑む明るさです。

また、伊予水軍の戦法をもとに、バルチック艦隊を破る作戦をたてた秋山真之には、「白砂糖は、黒砂糖からできる」と言わせました。まさに経験

を積上げた潜在意識から生まれる「ひらめき」が、起死回生を成し遂げるということです。

産業力の貧弱な小国が大国と対決した一世紀前とは比べものにならないほどの産業基盤を、今は有しています。「黒から白」を生む「ひらめき」、日本にしか出来ない「解」は、暗い気分では見えてこないでしょう。やはり明るさが大事です。そして、頭脳と技術をどう結び付けるか……新財団への期待は大きいと思います。

.....

高井 一 (たかい はじめ)

東海テレビアナウンサー。1953年、京都市生まれ。同志社大学文学部新聞学科卒。1976年、東海テレビに入社。1997年、名古屋大学大学院多元数理科学研究科修了。現在、編成局アナウンサー専門局長。

